源氏日報

歴史講座 平家物語

ねらう長男の藤原忠通が、後白河天皇と結びつきます。

一方、次男の藤原頼長は崇徳上皇と結びつきます。

こうして後白河天皇、崇徳上皇それぞれの陣営が源氏・平氏の武士をそれぞれに集めて争いました。

保元の乱

1156年保元の乱は天皇家の内部抗争に端を発します。

後白河天皇と崇徳上皇、それぞれが、どちらの皇子を次の天皇にするかという問題で対立します。

それに藤原氏…摂関家の内部抗争がからみ、話がさらに複雑になります。

藤原氏摂関家の跡取りを

保元の乱の痛ましいことには、親と子、兄と弟、叔父と甥が分かれて骨肉相食む争いとなったことです。

例えば、清盛と忠正。甥と叔父の関係です。為義と義朝。親子の関係です。義朝と為朝。兄弟の関係です。

このように肉親どうしが分かれて争ったという、たいへん痛ましい合戦です。

とはいえ、合戦そのものはわずか数時間で決着がつきます。後白河天皇方の勝利でした。

敗れた崇徳上皇は四国の讃岐に流されます。

崇徳上皇に加担した藤原頼長は流れ矢にあたって戦死しました。

保元の乱のほんとうに痛ましかったのは、合戦そのものよりも戦後の処理の方にありました。

死刑の復活

この保元の乱では、平清盛、源義朝、どちらも勝利者側でした。

だからこの保元の乱の段階では源平の争いでは有りませんでした。

しかし戦後の処罰はたいへんなものがありました。

350年ぶりに死刑が復活しました。しかもただの死刑じゃありませんでした。

清盛は敵対した叔父忠正を処罰させられます。叔父の首をはねさせられます。

義朝にいたっては、父為義の首をはねさせられます。

実の父の首をはねさせられたのです。

もちろん本人が手を下したのではなく、家人に命じてやらせましたが、考えられない出来事でした。命じたのは、後白河天皇の側近の入道信西という人物でした。能力があり頭が切れますが、とても冷酷な人物です。

また一方で、合戦においては義朝ら武士の意見を素直に取り入れて合戦を勝利にみちびくといった、度量の広いところもありました。

保元の乱のあと、勝利した後白河天皇はすぐに位を息子の二条天皇にゆずり、みずからは上皇となって権力をふるいます。

しかし、後白河の下で実際に政治を行ったのは、この信西です。

信西は荘園整理令を発して全国の土地を整理するなど、思い切った改革をすすめました。

大貴族や、寺社などの荘園も容赦なく没収していきます。

既得権をうばわれることは憎しみにつながります。

「ちくしょう。信西のやつ

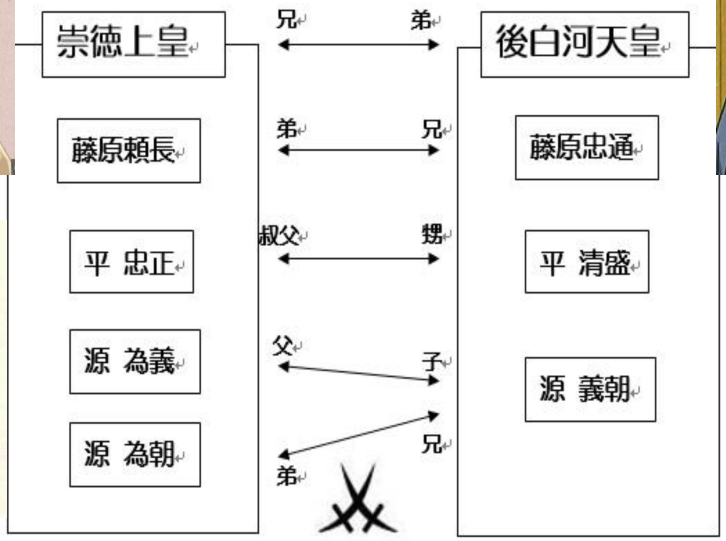
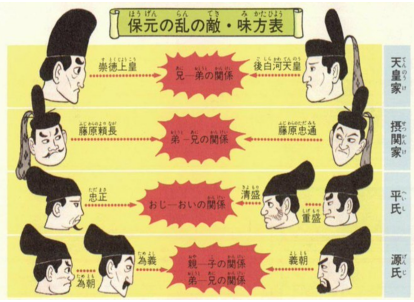
…やりたい放題やりやがって…

覚えておれーっ！」

恨みの声が全国で高まっていきます。

こうして、３年後の「平治の乱」へとつながっていきます。

保元の乱の一説でした・・

パパンパン

1156年　保元の乱　関係相関図